13　岐甲信の鬼瓦

三好　清超・柴田　洋孝

A　はじめに

本稿では、山梨県・長野県・岐阜県を対象に、甲斐国３遺跡 21 点、信濃国４遺跡 20 点、飛騨国３遺跡９点、美濃国２遺跡 13 点の鬼瓦を取り扱う（第１図）。

これまでの調査研究で、各地方の国分寺跡で鬼瓦の出土が知られ、他事例と比較されるなかで検討が行われてきた（前田 2000 など）。しかしながら、地方寺院の事例はそのような検討の中に含まれることは少ない状況であった。

今後の検討に資するため、本稿では各地方の国分寺跡の瓦を焼成した遺跡や地方寺院の鬼瓦等も踏まえた資料紹介を主目的とする。執筆は信濃国出土分を柴田が集成のうえＢ ii を執筆し、それ以外を三好が行った。

B　岐甲信の鬼瓦

ⅰ　甲斐

甲斐国分寺跡（第２～４図）　山梨県笛吹市に所在する。金堂跡、講堂跡、中門跡、回廊跡等から９破片が出土する（山梨県教育委員会 1970、一宮町教育委員会 1990、山梨県 1998、笛吹市教育委員会 2012・2020）。１は脚部右下端、２は脚部左下端、３は額部から顔面部左外縁・脚部左下端、４は鼻部、５は脚部左下端、６は脚部右下端、７は額部周辺、８・９は顔面部左外縁である。３が最も残りが良い。それと比較し、紋様は１種類で全て同一のものと考えられている（笛吹市教育委員会 2020）。２・３・５、２・３・９、３・８・９は同じ部位のため、少なくとも３個体分があると考えられる。

これまでの研究では、まず櫛原により、文様構成が「南都七大寺式に類似する」と指摘され、「耳、線鋸歯文を省略しており、Ⅳ式期に並行する」と考えられた（櫛原 1992）。ここでは、毛利光の年代観（毛利光 1980）から天平宝字年間のものとされた。その後、山本により「憤怒の形相があらわで、一見大宰府式に似る」とも考えられた（山本 1998）。

文様は１種類であり、鬼面文鬼瓦である。アーチ形を呈する。外縁が直立する素文縁であり、頂部が台形に突出する。抉りは縦長半円形を呈する。顔面部は眉間に半弧状のしわがあり、眼を吊り上げる。大きく口をひらき、歯の本数は知りえないが上前歯を張り出し、上下の牙をむき出す。低く盛り上げて鼻を成形する。裏面は全面にヘラケズリを施す。両眼の中央眼寄りに、裏面から顔面方向に穿孔した円形の釘穴を有する。

製作痕跡として、３に木目が残る。このため、笵により成形されたものと考えられる。また、７の破断面と裏面及び９の断面で、外縁突出部と顔面部に継ぎ目を確認でき、８で粘土板の合わせ目を確認できた。ここから、外縁突出部にまず粘土を詰め、その後、顔面部の粘土を詰めて製作したと考えられた。さらに、顔面部は粘土板を合わせて製作した可能性を想定できる。

笵による製作と考えられたため同笵認定を試みたところ、３と７で額部の同位置に笵傷を確認できた（第５図）。他は確認できなかったものの、全て同笵と考えられる。

年代については伴う軒瓦から検討する。甲斐国分寺跡では、平城宮 6316 系の軒丸瓦と平城宮 6691 系の軒平瓦を創建に伴う軒瓦のセットと考え、750 年代後半から造営開始と考えられている（笛吹市教育委員会 2020）。鬼瓦も創建に伴うものと考えられることから、８世紀後半に製作されたものと考えられる。

上土器遺跡（第６図）　山梨県甲府市に所在し、甲斐国分寺跡に瓦を供給した３基の瓦専用窯があったとされる上土器遺跡からは、３破片の出土が知られる（櫛原 1992、甲府市教育委員会 2004）。10・11 は鬼面文鬼瓦である。10 は２号窯跡出土の鼻部、11 は瓦集中地点出土の顔面部左眼周辺部である。甲斐国分寺跡の鬼瓦と同一文様であることが知られていたため、今回同笵認定を試みた。

11 には額部に弧状の２本の皺があり、その上側の皺の右端に２条の笵傷が認められる。甲斐国分寺跡出土の３で同じ位置を確認したところ、同様に２条の笵傷が認められた（第７図）。このため、甲斐国分寺跡３と上土器遺跡 11 は同笵と考えられる。軒瓦同様、鬼瓦も上土器遺跡で焼成され、甲斐国分寺跡に供給されたと考えられた。

12 は表裏面にヘラケズリを施し、中央に方形の釘穴を有する。鬼板と考えられる[1]。

宮ノ前第２遺跡（第８図）　山梨県韮崎市に所在し、奈良時代の掘立柱建物跡４棟、平安時代の竪穴建物跡 10 軒が見つかった遺跡である。２間×３間の身舎に四面庇が付き、仏堂と推測された４号掘立柱建物跡周辺で、丸・平瓦、瓦塔片とともに鬼瓦９破片が出土した（韮崎市教育委員会 1991）。

13 は顔面部右眼、14 は鼻部、15 は顔面部左外縁から脚部左下端、16 は額部、17 は鼻部である。残り４点は細片である。14・15・17 の鼻部が同一部位のため、少なくとも３個体分があったものと考えられる。

文様は１種類であり、鬼面文鬼瓦である。アーチ形を呈する。外縁が傾斜して立ち上がる素文縁である。抉りは下辺中央１ヶ所で縦長半円形を呈する。顔面部は、眉や毛の表現をヘラ状工具による沈線で施す。眼と口は楕円形にくり抜いて表現され、口は口角が若干上がり、眼は目尻が垂れ下がる。鼻はケズリとナデで成形し、鼻孔を穿った粘土塊を張り付けており、15 には貼付した粘土塊が残り、17 は張り付けた粘土が剥離する。裏面は全面に布目圧痕が残る。眉間に裏面から顔面方向に穿孔した円形の釘穴を有する。

製作痕跡として、裏面の布目圧痕、13・15 の断面で外縁部と顔面部に粘土の継ぎ目、ま

た眼・口・下辺の抉りにヘラケズリ、13・16・17 の裏面で外縁や眼の縁に沿ったナデを観察できる。これらから、外縁部と顔面部を別粘土で接合して成形台で成形した後、顔面部をヘラ状工具で施文し、最後に裏面から釘穴を穿孔し、縁に沿った部分にナデを施して整えたものと想定される。

年代は、伴う須恵器等が８世紀代のものであり、絞ることが難しい状況であった。

ⅱ　信濃

長野県内（信濃国）ではこれまでに 69 地点 88 遺跡で古代瓦の出土が確認されており、約 17 遺跡が寺院跡と考えられている（柴田 2018・2019a）。それらのうち、発掘調査によって寺院跡もしくはそれに付随するとみられる遺構・遺物が確認されている遺跡は、長野市元善町遺跡・千曲市雨宮廃寺・上田市信濃国分寺跡・安曇野市明科廃寺・松本市大村廃寺ぐらいであるが、鬼瓦の出土が確認されていたのは信濃国分寺跡だけであった。

2018 年に安曇野市明科廃寺で行われた発掘調査によって、鬼瓦とみられる道具瓦の破片が複数確認された（安曇野市豊科郷土博物館 2019・安曇野市教育委員会 2021）。このため、長野県における鬼瓦の出土遺跡は２地点となったものの、信濃国分寺跡および明科廃寺から出土した鬼瓦の点数は 20 点と極めて少なく、全体が復元できるものは信濃国分寺跡出土のものに限られている。

信濃国分寺跡（第９～ 14 図）　信濃国分寺跡はこれまでの発掘調査によって、僧寺跡・尼寺跡・瓦窯跡から合計 15 点が確認されており、完形のものは１点である。1974 年刊行の報告書において、素文をＡ型式、鬼面文をＢ型式として分類しているが、製作技法などについての記載はなく、詳細は検討されていない（上田市教育委員会 1974）。

出土資料の大半を占める素文鬼瓦は、調整および破断面にみられた粘土の痕跡、脚部の幅の違いなどから、型（笵）ではなくすべて手捏ねによる成形であると考えられる。文様が一切ないため、調整痕の状況から表裏を判断するしかないが、基本的に調整がきれいで凹凸が少ない面を表、ケズリおよび粘土の痕跡などが確認できる粗雑な面を裏と判断した。

表面および破断面の観察から、いずれの資料も厚さ２cm 前後の粘土を３～４回に分けて積み上げて成形しているものとみられ、表裏面はケズリおよびヘラまたはハケナデによって調整されている。また、釘穴は棒状の工具を差込んで貫通させているとみられ、穴の位置については 18 と 20 は上方、19 は中央付近に開けられるなど、若干の差が確認できる。脚部の幅は基本的に 10cm 前後のものが多いが、18・31 は最大で約 11cm を測るのに対し、19 は約８cm と狭く華奢な印象を受ける。この点について、製作時の工人の差なのか、設置箇所の差を示すものなのかは明確でないが、脚部の幅だけで見ると、大きく２種に分類できるようである。

鬼面文は尼寺跡で２点が確認されているが、いずれも小片であり全体像を復元するには至らない。28 の裏面に布目痕が確認できることから、板状の成形台に布を敷いて作られた

事が想定され、残存している側面にはケズリおよびナデの調整と、明瞭な面取りが認められる。脚部の破片とみられ、全体的な形状はかまぼこ状を呈すると考えられる。厚さ３cmほどの粘土を板状に成形しており、表面には粘土の貼付および剥離の痕跡が認められるが、どのような表情であったのかは不明である。29については粘土が丸く突出しているため、目の破片であることは間違いないと思われるが、目尻や鼻筋の表現を欠いているため、上下及び左右について詳細は不明である。

最後に、年代観について検討する。信濃国分寺跡からは素文と鬼面文の２種類が出土しているが、出土状況および個体の確認数からすると素文鬼瓦が主体的に使用されていたと考えられる。一方、国分寺に隣接した場所で発見された有畦式平窯（当時はロストル式平窯として報告）については、発掘当初の見解として平安期における補修瓦を焼いたものであるとみなされ、瓦窯の出土遺物の中に素文鬼瓦が確認されていることから、創建当初は鬼面文が葺かれ、素文は補修用に焼かれたものであるとされている（上田市誌刊行会2000）。しかし、近年の研究によって年代が推定されている他県の有畦式平窯の形態・構造と比較した結果、信濃国分寺瓦窯跡について８世紀第３四半期に構築・操業されたと推定されている。国分寺の造営が遅延していた８世紀中頃には督促状が出され、信濃国分寺は８世紀後半（770年前後）の道鏡政権下において大きく手が加えられ、畿内の文様を用いた軒瓦によって総瓦葺となり、最新式の窯も導入されたようである（柴田2019b）。これらの軒瓦と同時期に使用されていたとすれば鬼瓦の製作も８世紀後半と考えられるが、軒瓦は畿内の文様を導入しているのに関わらず、棟に飾る鬼瓦に文様がないというのは疑問も残る。

鬼面文鬼瓦については個体数が少なく、尼寺跡でしか出土が確認されていない。信濃国分寺が総瓦葺になる以前、尼寺を中心に先行的に建物が建てられ、そこには８世紀前～中頃に造営された在地寺院の瓦が使用されていたとの研究がある（倉澤・鳥羽2014）。鬼面文鬼瓦もそうしたものの一部とすれば、素文鬼瓦よりも古い年代に製作されたものと考えられるが、在地寺院（未調査）および在地寺院に供給していた窯（煙滅）の出土遺物に鬼面文鬼瓦が確認されていないため、詳細は不明である。

明科廃寺跡（第15図）　明科廃寺は2015年までに４回の発掘調査が行われ、これまでに鬼瓦の出土は確認されていなかった。2018年には個人住宅の建設に伴う第５次発掘調査（約40㎡）が行われ、寺院に直接関連する遺構などは確認されなかったが、瓦の廃棄場所とみられる堆積層を確認し、約2.5ｔの瓦が出土している（安曇野市教育委員会2021）。出土遺物の整理途中で鬼瓦とみられる製品を複数確認したことを受け、正式報告前ではあるが本稿に掲載させていただき、観察によって得られた所見を述べることとする[2]。

出土した破片は接合せず、胎土・焼成についても差が認められたため、同一個体であるかは定かでないが、仮に同一の鬼面文を採用した鬼瓦であると仮定した場合の想定復元図は第15図の通りである。33・36・37に明瞭な面取りがあることから、やや縦長の十角形を呈するとみられ、粘土の貼付によって眉・目・口が表現され、線刻によって鬼の険しい

表情がより強調されているようである。いずれの破片も表面に粘土を貼り付けて各部位を表現しており、ナデの痕跡が認められることから、型（笵）による成形ではなく手捏ねによる成形であると考えられる。

33は眉間から左目の目尻にあたる部分とみられ、厚さ3cmほどの粘土板を成形して表面に眉などを表現する粘土が貼り付けられている。裏面には指頭圧痕とみられる複数の凹凸が認められ、成形時に付いたものと考えられるが、裏面の調整は不十分である。他の破片は還元焔（一部生焼け）の灰色であるのに対し、33は酸化焔で黄灰色を呈すため、別個体の可能性も否定できない。34～37は色調・焼成・胎土などから同一個体の可能性が高いが、接合はできない。製作技法については33と同様に厚さ3cmほどの粘土板を成形して目や口元の表現として粘土を貼り付けており、一部で剥離痕が認められる。

年代観についてであるが、明科廃寺出土の鬼面文鬼瓦は瓦の廃棄場のような場所から出土しており、瓦以外の出土遺物は平安期のものまで含んでいることから、廃棄層（第Ⅲａ層）の堆積は9世紀後半以降と判断されている（安曇野市教育委員会2021）。鬼瓦が寺院の創建にあわせて製作されたものであれば7世紀後半から末頃と考えられるが、現状の出土状況では建物跡などの遺構に伴っておらず、年代を絞ることは難しい。また、県内の類例も少ないため比較が難しいが、信濃国分寺跡出土の鬼面文鬼瓦は、厚さ3cmほどの板状の粘土を成形し粘土の貼り付けを行って表情を作り上げており、この点については明科廃寺出土鬼面文鬼瓦と技法が共通しているように思われる。

明科廃寺の発掘調査によって鬼瓦の確認例が増えたものの、全体像が窺える資料は依然として少ないのが長野県の現状である。

ⅲ　飛騨

飛騨国分寺瓦窯跡（赤保木瓦窯跡）（第16図）岐阜県高山市に所在する。38・39は灰原から出土している。40・41は採集品である（高山市教育委員会1975）。38は顔面部左側から脚部左下端、39は鼻部から顔面部左側、40は左眼から顔面部右側、41は脚部左下端である。38が最も残りが良く、39と41の紋様が重なる。40は左眼と外縁の間に渦巻文様の巻毛が認められ、38や41に見られる巻毛と連続するように観察できるため、紋様は1種類と考えられる。文様の重なりから、笵により製作されたと考えられる。38・41は同じ部位のため、少なくとも2個体分があると考えられる。

これまでの調査研究では、八賀により早くから様相が示された（高山市教育委員会1975）。それを受け毛利光が、下牙を表現する古い様相を呈するものの、伴う軒瓦から「8世紀前半には遡らせがたい」と指摘している（毛利光1980）。その後、前田は、上下の牙を有すること及び連珠文帯が下辺に及ぶことが美濃国分寺跡鬼瓦と共通すると指摘し、美濃国分寺跡鬼瓦をさらに在地化させたものと考えた（前田2000）。

文様は1種類であり、鬼面文鬼瓦である。アーチ形を呈する。外縁には二重に直立する

突帯を巡らせ、外側を素文縁、内側を珠文帯とする。抉りは縦長半円形を呈する。団栗眼の瞳は突出し、吊り上がる。大きく口をひらき、３本の上前歯を張り出し、上下の牙をむき出す。低く盛り上げて鼻を成形し、鼻孔はない。裏面には縄タタキ痕が前面に残る。口の中央に円形の釘穴を有する。

製作痕跡として、40・41 で粘土板の合わせ目、外縁と珠文帯の接合痕、40 で突出した瞳に接合痕を確認できた。ここから、外縁と珠文帯及び瞳にまず粘土を詰め、その後、顔面部に２枚の板状の粘土を詰め、叩きしめて製作したと考えられた。また、38 と 41 で同笵認定のために笵傷を探したが、認められなかった。

年代を伴う軒瓦から検討する。飛騨国分寺跡の造営は、平城宮の文様と似るものの製作技法が異なる軒瓦類から、文様が退化し、在地の技法で製作される８世紀第３四半期になった段階と考えている（三好 2016）。鬼瓦も造営に伴い製作されたと考えられることから、８世紀後半のものと考えられる。

飛騨国分寺跡（第 17 図）　岐阜県高山市に所在する。飛騨国分寺跡からは４破片の出土が知られる（高山市教育委員会 1988・高山市教育委員会 2009）。42 は金堂跡の東側から、43～45 は金堂跡から南へ 35m 地点の瓦溜り層から出土した。42 は脚部左下、43 は脚部下端の破片である。直立した二重の外縁のうち、内側に珠文を配する。42 の裏面は縄タタキ痕が残る。飛騨国分寺瓦窯跡の鬼瓦と同一の紋様であり、同一の製作痕跡を残す。このため、軒瓦と同様、飛騨国分寺瓦窯跡から供給されたものと考えられる。

44・45 は渦巻文様から突線がのびる。飛騨国分寺瓦窯跡の鬼瓦には、このような文様構成はなく、別文様のものと考えられる。

飛騨国分尼寺跡　岐阜県高山市に所在する。金堂跡の発掘調査で１点出土したとされる（高山市教育委員会 1990）。詳細は不明であった[3]。

ⅳ　美濃

美濃国分寺跡（第 18・19 図）　岐阜県大垣市に所在する。金堂跡南東隅の瓦溜り、講堂跡周辺、伽藍南面の近世～近代の盛り土、伽藍南面の自然流路から 10 破片が出土する（大垣市教育委員会 1969・1971・2005a・b）。46 は顔面部左外縁から左下端を欠くもの、47 は顔面部左半分、48 は左右の外縁を欠くもの、49・50 は脚部右下端、51 は口の上牙部、52 は前歯左側２本、53 は顔面部左外縁、54 は顔面部右外縁、55 は脚部右下端である。46 と 48 で２種類の鬼面文が確認できる。また、46 からは、拝みの瓦と同様に焼成されたと考えられている。46・47・51・52 は前歯左側の同一部位のため、少なくとも４個体分があると考えられる。

これまでの調査研究で、毛利光は 46 の下牙を表現する点が古い様相を呈すると指摘し、拝みの瓦が創建期の軒丸瓦と近い文様を持つことから、８世紀中頃から後半のものと考えた（毛利光 1980）。また、八賀により鬼面は 46 と 48 から２種類があると示された（八賀

1997)。その後、前田は、46をⅠ式A、48をⅠ式Bと分類し、ともに創建時に作られたと考えた。さらに、Ⅰ式Aは連珠文帯の配列等が大宰府式鬼瓦に、歯牙や耳の表現等が南都七大寺式鬼瓦に類似すると指摘し、「南都七大寺式鬼瓦との比較で、天平勝宝年間頃」に製作されたと考えた（前田 2000)。

46・47・51・52 ～ 55は同一文様の鬼面文鬼瓦である。円頭台形を呈する。外縁に沿って連珠文帯が巡る。抉りは下辺中央と両隅の３か所にあり、円形を呈する。眉間にV字状の皺が寄り、瞳を吊り上げる。大きく口を開き、上唇から４本の前歯と上下の牙をむき出す。上唇に沿って髭があり、両眼の外側には渦巻文様により耳が表現される。背面上部には、棟に鬼瓦を固定するための把手が付き、下辺中央の抉りには軒丸瓦が付く。軒丸瓦は、円形の中房に、１＋８の蓮子を配する鋸歯文縁細弁十六弁蓮華文軒丸瓦である。拝みの瓦の下部にも半円形に抉りが入る。

49・50は脚部右下端と見られる破片である。46は抉りが両隅にも入るが、この49・50に加え55にも抉りが見られない。このことは、前田により、46は降棟か隅棟に使用され、また49・50・55からは下辺にまで連珠文帯が巡ることが分かると指摘されている（前田 2000)。

48は別文様の鬼面文鬼瓦である。円頭台形を呈する。外縁は連珠文帯である。抉りの形状は欠損のため不明である。眉間に逆Ｕ字状の皺が寄る。団栗眼は突出する。大きく口を開き、上唇から８本の前歯と牙をむき出す。低く盛り上げて鼻を成形する。鼻の中央に円形の釘穴を有する。

最後に、製作年代について検討する。美濃国分寺跡の造営は、梶原により、主要瓦である軒丸瓦ＭⅡ形式と軒平瓦ＨⅡ型式のセットが、「本格的造営の開始（礎石建瓦葺化)」に伴って大安寺式瓦の系譜を引く尾張国分寺からもたらされたものであり、「760年代前半頃を上限」と考えられている（梶原 2016)。鬼瓦も寺院の瓦葺化に伴うものと考えられることから、８世紀後半のものと考えられる。

長良廃寺跡（第20図） 岐阜県岐阜市に所在する。７世紀後半に成立したとされる古代寺院である。そこから、鬼面文鬼瓦２点、脚部の可能性がある破片１点が出土した。

調査報告書では、鬼瓦の鬼面文様が複弁七弁鬼面文軒丸瓦に類似すると指摘され、笵を用いて作成されたと考えられた。また、小型で薄いことから、「降棟等小型でも用をなす部分に用いられた」と考えられた（岐阜市教育委員会 1990)。さらに、前田は、鬼面文軒丸瓦と同様の文様構成をとったと推定して復元図を提示し、軒丸瓦の歯牙の表現が平城宮式鬼瓦Ⅱ式と類似すると考え、８世紀前半のものと位置付けた（前田 2000)。

56・57は鬼面文鬼瓦である。アーチ形を呈する。外縁は素文で平縁であり、縁に沿ってナデを施す。額に２連ずつのＵ字状突線と逆Ｕ字状突線を施し、皺を表現する。瞳は杏仁形を呈する。眼より額部にかけてしか残っておらず、抉りや釘穴の有無は不明である。56・57の文様構成とそれぞれの間隔が同じであるため、笵による製作と考えられる。

製作痕跡として、眉の接合痕跡、鬼面及び裏面のナデが認められる。鬼面のナデ調整により、額部の皺は56より57の方が鮮明である。

58は報告書で鬼瓦の脚部の可能性を持つとされた破片である。沈線を施す。

C　おわりに

岐甲信の各国における鬼瓦の出土状況を述べてきた。飛騨国では国分寺関連遺跡のみであったが、甲斐国・信濃国・美濃国では国分寺関連遺跡と地方寺院での出土が認められた。概して、各国分寺跡出土の鬼瓦は精緻な文様であるのに対し、各国の地方寺院出土の鬼瓦は文様が粗い印象を受けた。また、笵により製作されたと考えられていたもののうち、甲斐国分寺跡例と上土器遺跡例で新たに笵傷による同笵認定を行うことができた。

時期については、美濃国において８世紀前半に地方寺院である長良廃寺跡で用いられ、その後の８世紀後半になって美濃国分寺跡で製作された状況を示すことができた。一方、甲斐国の宮ノ前第２遺跡は８世紀代の須恵器等と共に出土し、信濃国の明科廃寺跡例は９世紀後半以降に堆積したと考えられる瓦を廃棄させたような層から出土するため、それぞれ年代を決め難い。このため、各国分寺例との先後関係について検討が及ばなかった。なお、長良廃寺跡例は笵による製作、宮ノ前第２遺跡例及び明科廃寺跡例はヘラ描き施文という相違点がある。

以上のように岐甲信の鬼瓦では、８世紀中ごろから後半にかけての創建時に鬼瓦が製作される各国分寺例と、各地方寺院例では文様構成に大きな違いがみられ、それらの関係性は見出しがたい（第１表）。また、各地方寺院例でも笵製作の例とヘラ描き施文の例がみられる状況であった。

なお、各国分寺間の展開という視点では、前田により美濃から飛騨への変遷が想定されていた（前田2000）。一方で、美濃－飛騨間では他の瓦類での変遷は想定されたことは無い。また、甲斐・信濃において国分寺と地方寺院の鬼瓦に変遷が認めがたい状況は、軒瓦の瓦当文様や製作技術が地方寺院から各国分寺へ展開していた様相（櫛原1992など）と異なる。このため、岐甲信においては、鬼瓦工人と瓦工人が別系統で技術を受容・展開させた可能性を想定することができる。

（飛騨市教育委員会・長野県立歴史館）

第１表　岐甲信の鬼瓦の年代一覧表

	甲斐	信濃	飛騨	美濃
国分寺	8世紀中～後	鬼面紋：8世紀前? 素紋：8世紀後	8世紀後	8世紀後
地方寺院	8世紀代＿宮ノ前第２	時期?＿明科廃寺	―	8世紀前＿長良廃寺

謝辞

本稿を作成するにあたり、下記の機関や方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

安曇野市教育委員会、上田市立信濃国分寺資料館、大垣市教育委員会、岐阜市歴史博物館、甲府市教育委員、高山市教育委員会、韮崎市教育委員会、笛吹市教育委員会、山梨県立博物館、山梨県立考古博物館、一之瀬敬一、閏間俊明、江草俊作、大嶌正之、押井正行、尾見智志、高田康成、土屋和章、平塚洋一、前田清彦

註

1　報告書では塼の可能性が指摘され（甲府市教育委員会 2004）、その後、鬼板の可能性が指摘された（笛吹市教育委員会 2020）。ここでも、釘穴の存在から鬼板と考えて報告する。

2　明科廃寺跡の鬼瓦については、現在整理中で今後報告書が刊行される予定である。今回、安曇野市教育委員会のご厚意により、実測・紹介等を許可していただいた。

3　報告書に飛騨国分尼寺跡で出土した旨の記述がある（高山市教育委員会 1990）。しかし、図版等では確認できず、今回は実見もできなかった。

参考文献

安曇野市教育委員会 2021『明科遺跡群明科廃寺第５次発掘調査の概要』

安曇野市豊科郷土博物館 2019『ふるさと安曇野 きのう きょう あした』№19

一宮町教育委員会 1990『甲斐国分寺跡－寺域及び遺構確認を目的とした緊急発掘調査報告書－』

稲垣晋也 1971『古代の瓦』日本の美術第 66 号　至文堂

岩戸晶子 2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦－瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷－ 」『史林』第 84 巻第３号　史学研究会

上田市教育委員会 1974『信濃国分寺－本編－』

上田市教育委員会 2006『史跡信濃国分寺跡　平成 14（2002）年度～平成 17（2005）年度記念物保存修理事業に伴う史跡信濃国分寺跡僧寺北東地域および僧寺南大門推定地発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第 100 集

上田市教育委員会 2014『史跡信濃国分寺跡　平成 22（2010）年度～平成 24（2012）年度史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書』上田市文化財調査報告書第 117 集

上田市誌刊行会 2000『上田市誌 歴史編（３）東山道と信濃国分寺』

上田市立信濃国分寺資料館 2014『信濃国分寺跡発掘五十年』

大垣市教育委員会 1969『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告』

大垣市教育委員会 1971『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告Ⅲ』

大垣市教育委員会 1981『史跡美濃国分寺跡環境整備事業報告』

大垣市教育委員会 2005a『史跡美濃国分寺跡』

大垣市教育委員会 2005b『史跡美濃国分寺跡－国分寺遺跡（伽藍南面隣接地の調査）－』大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集

梶原義実 2016「東海道・東山道の国分寺瓦（Ⅰ）－尾張・美濃国分寺について－ 」『日本古代考古学論集』 同成社

梶原義実 2017「信越地方の国分寺瓦」『名古屋大学文学部研究論集』史学 63

岐阜県博物館 1995『美濃・飛騨の古代史発掘－律令国家の時代－』

岐阜市教育委員会 1990『城之内遺跡－東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査－』

櫛原功一 1992「甲斐国分寺瓦の変遷」『帝京大学山梨文化財研究所』第４集 帝京大学山梨文化財研究所

倉澤正幸・鳥羽英継 2014「改作された国分寺－信濃国分寺跡の近年の研究成果から－」『季刊考古学』第 129 号

甲府市教育委員会 2004『甲府市内遺跡Ⅰ－昭和 61 年度～平成５年度試掘調査報告書－』甲府市文化財調査報告 26

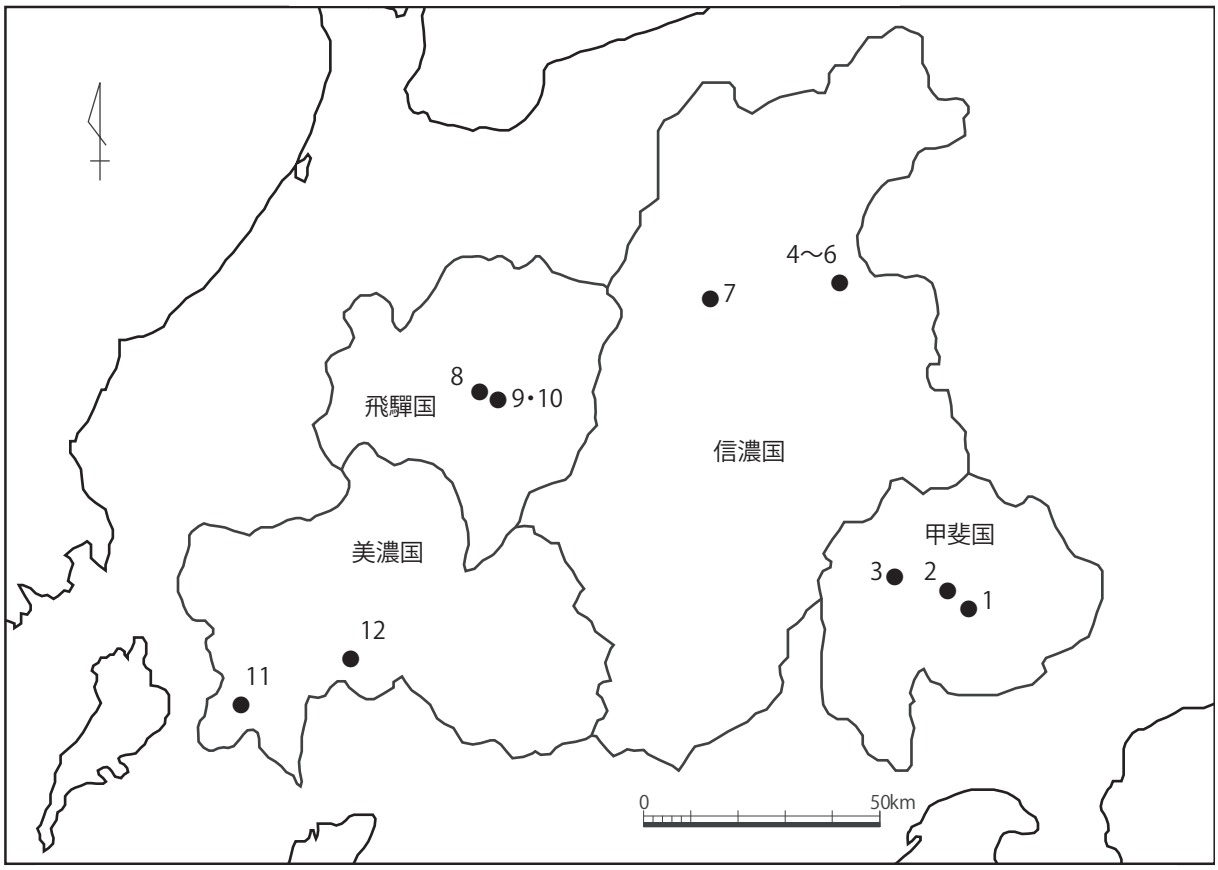
柴田洋孝 2018「Ⅸ調査研究ノート（２）長野県における古代瓦出土地点（東北信編）」『長野県埋蔵文化財セン

ター年報 34　2017 年度』
柴田洋孝 2019a「Ⅸ調査研究ノート（２）長野県における古代瓦出土地点（中南信編）」『長野県埋蔵文化財センター年報 35　2018 年度』
柴田洋孝 2019b「信濃国分寺瓦窯跡」『古代東国の国分寺瓦窯』古代東国の考古学５　高志書院
鈴鹿市考古博物館 2005『古代の鬼瓦』
高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1988『飛騨国分寺発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告書第 15 号
高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺跡発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告書第 17 号
高山市教育委員会 2009『高山市内遺跡発掘調査報告書』高山市埋蔵文化財調査報告書第 30 号
竹中大工道具館 2017『千年の甍　古代瓦を葺く』
田中　彰 1997「第三部第二　飛騨」『新修国分寺の研究』第七巻補遺　吉川弘文館
韮崎市教育委員会 1991『宮ノ前第２遺跡・北堂地遺跡』
八賀　晋 1997「第三部第一　美濃」『新修国分寺の研究』第七巻補遺　吉川弘文館
笛吹市教育委員会 2012『国指定史跡甲斐国分寺跡－金堂跡確認調査の概要報告書－』笛吹市文化財調査報告書第 22 集
笛吹市教育委員会 2020『史跡甲斐国分寺跡－史跡整備のための伽藍中枢部の遺構確認調査報告書－』笛吹市文化財調査報告書第 43 集
前田清彦 2000「東海地方の古代の鬼瓦とその系譜」『三河考古』13　三河考古刊行会
三好清超 2016「第 10 章第１節　古代寺院」『高山市史　先史時代から古代編（下）』高山市史編纂資料第５号の２
毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦―８世紀を中心として―」『奈良国立文化財研究所研究論集６』奈良国立文化財研究所学報第 38 冊
山梨県 1998『山梨県史　資料編１　原始・古代１　考古（遺跡）』
山梨県 1999『山梨県史　資料編２　原始・古代２　考古（遺構・遺物）』
山梨県教育委員会 1970『甲斐国分寺跡発掘調査概報』
山梨県立考古博物館 2018「願いをかなえてほとけさま－甲斐の古代寺院－」山梨県立考古博物館平成 30 年度夏季企画展資料
藪中五百樹 1997「興福寺式軒丸瓦と鬼瓦製作技法の研究」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
山崎信二 2006「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館
山本忠尚 1998『日本の美術第 391 号　鬼瓦』　至文堂

図・写真出典

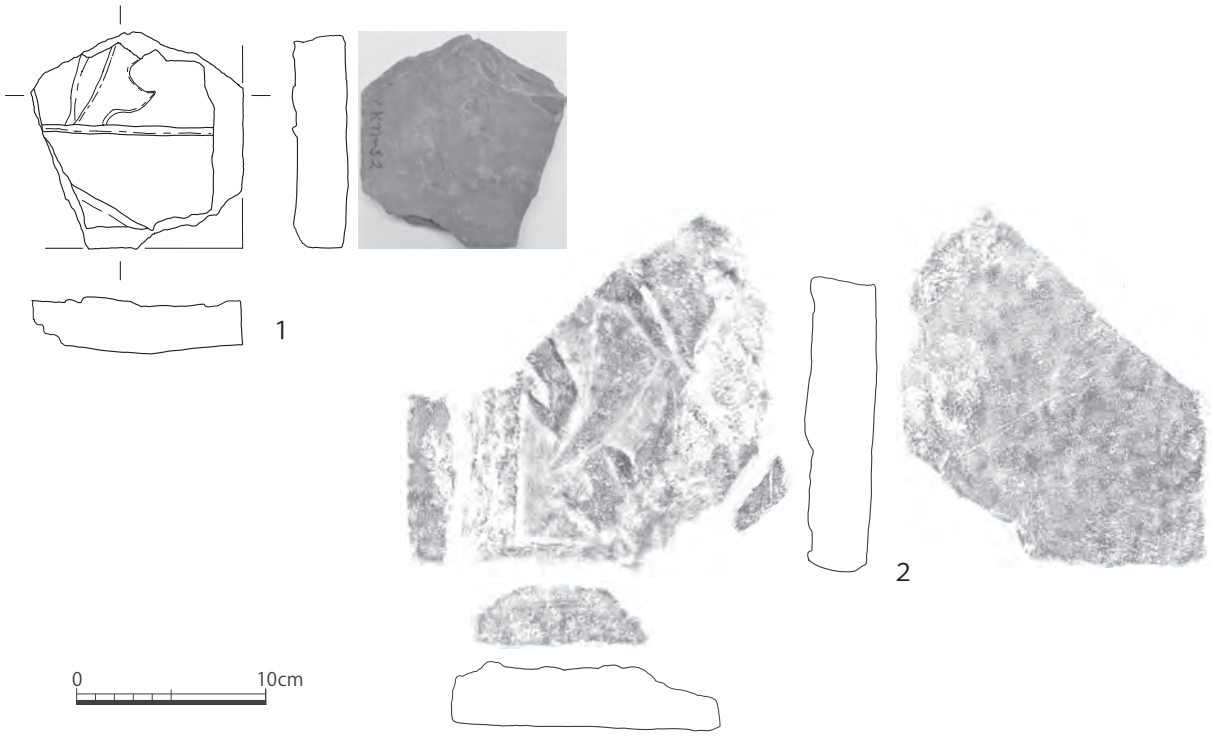
第１・２図：三好実測・撮影。
第３図３：笛吹市教育委員会 1990。４：笛吹市教育委員会 2012。
第４図：笛吹市教育委員会 2020。
第５図：三好撮影。
第６図 10：櫛原 1992。11・12：甲府市教育委員会 2004。
第７図：三好撮影。
第８図：韮崎市教育委員会 1991 を一部改変。三好が断面実測。
第９～ 11 図：柴田実測。
第 12 図：25 は上田市教育委員会 2006。それ以外は柴田実測。
第 13 図：27 は上田市教育委員会 2014。それ以外は柴田実測
第 14・15 図：柴田実測。

第 16 図：３次元データを三好作成。
第 17 図：42 の３次元データを三好作成。それ以外は高山市教委 2009。
第 18 図：大垣市教委 2005a を一部改変。
第 19 図：大垣市教委 2005b。
第 20 図：岐阜市教委 1991 に三好が補足実測して一部改変。

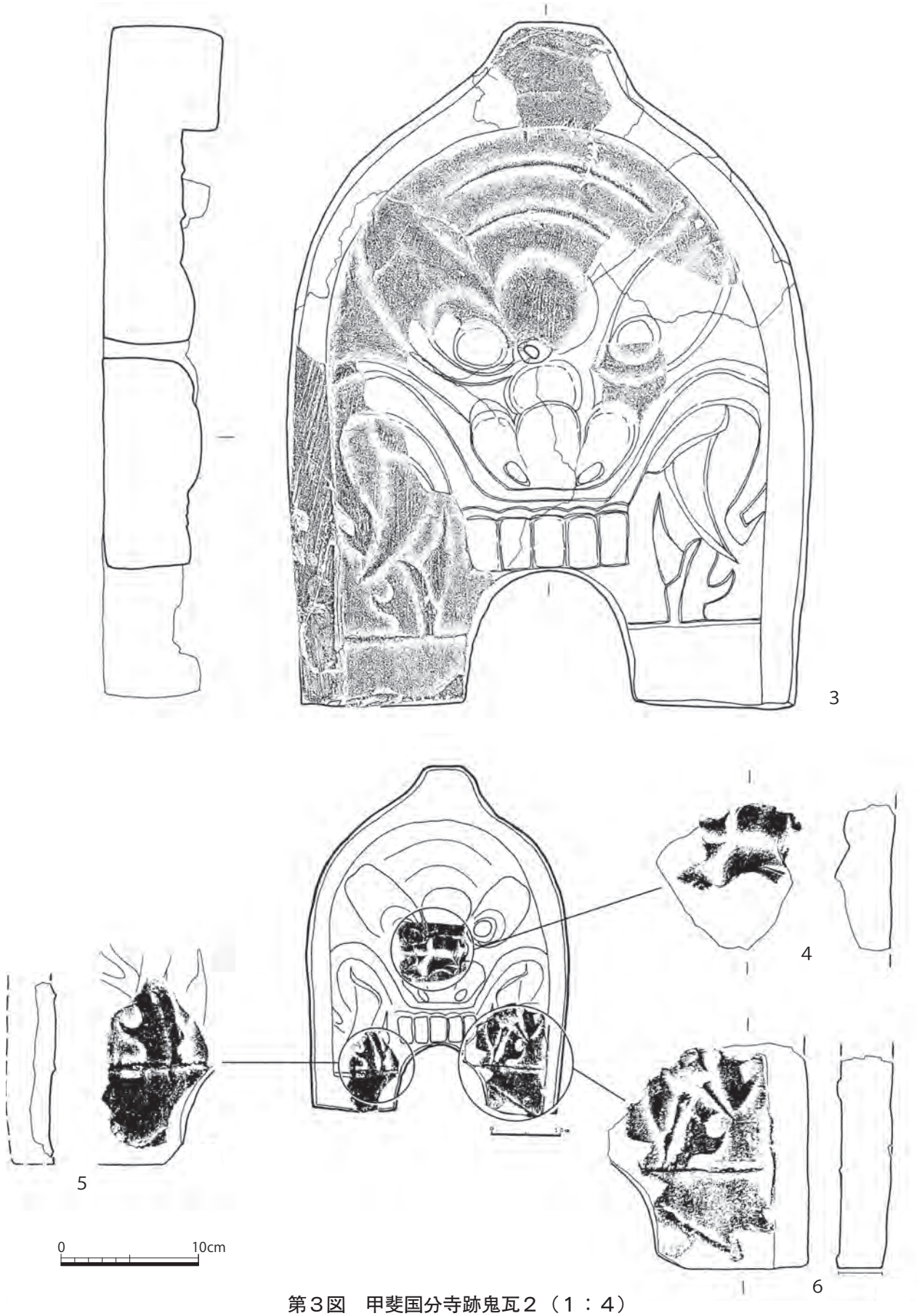


1：甲斐国分寺跡（山梨県笛吹市）　2：上土器遺跡（山梨県甲府市）　3：宮ノ前第2遺跡（山梨県韮崎市）　4：信濃国分寺跡（長野県上田市）
5：信濃国分尼寺跡（長野県上田市）　6：信濃国分寺瓦窯跡（長野県上田市）　7：明科廃寺跡（長野県安曇野市）　8：飛騨国分寺瓦窯跡（岐阜県高山市）
9：飛騨国分寺跡（岐阜県高山市）　10：飛騨国分尼寺跡（岐阜県高山市）　11：美濃国分寺跡（岐阜県大垣市）　12：長良廃寺跡（岐阜県岐阜市）

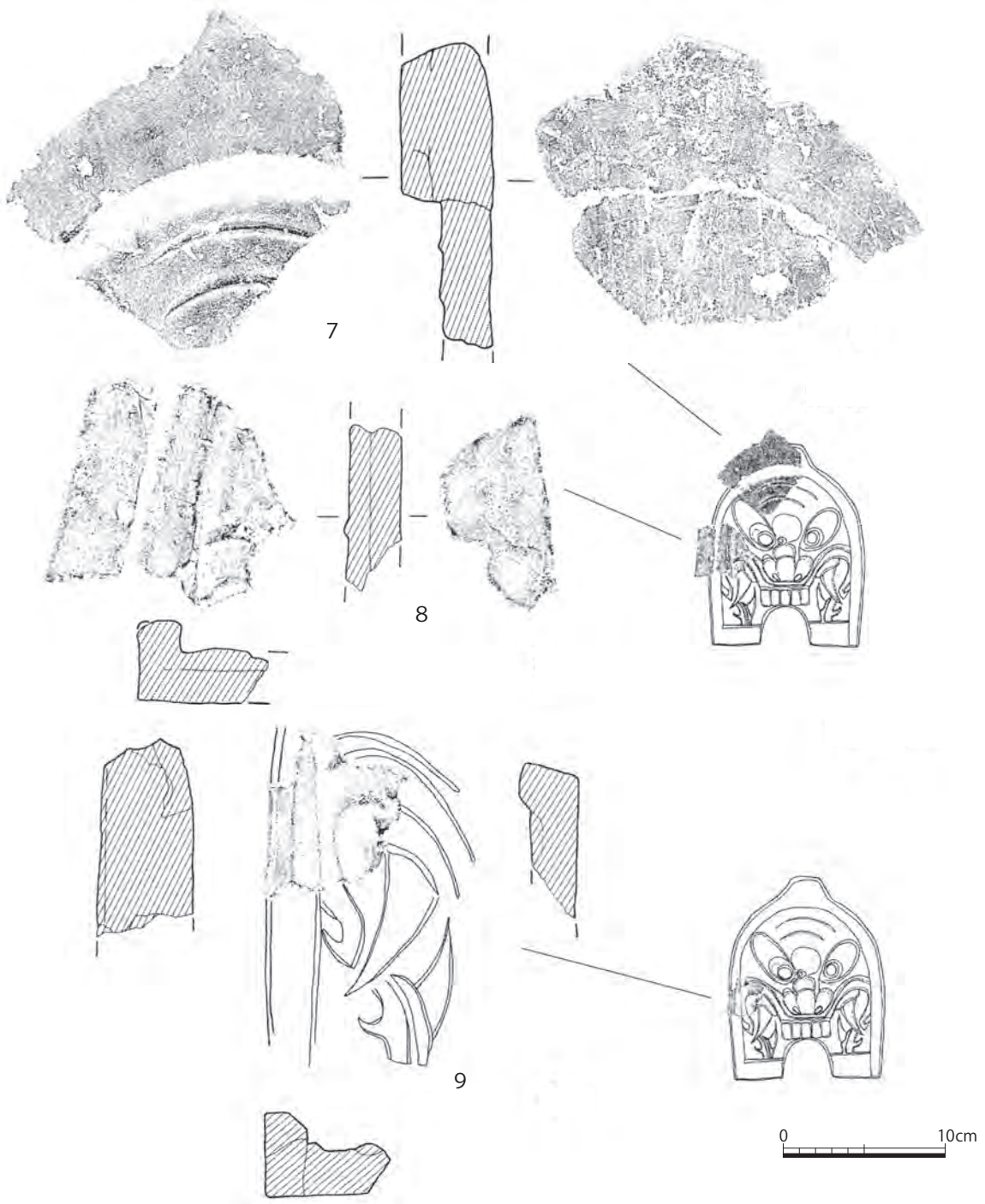
第１図　中部地方の鬼瓦出土遺跡位置図（１：1,600,000）



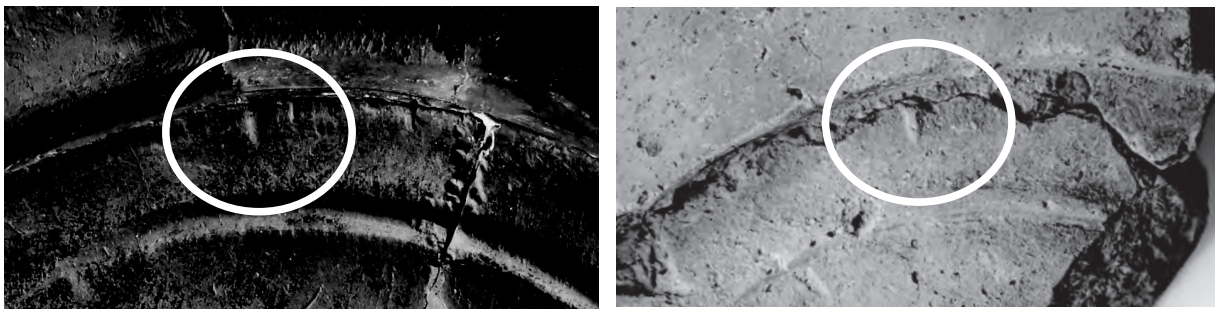
第２図　甲斐国分寺跡鬼瓦１（１：４）



第３図　甲斐国分寺跡鬼瓦２（１：４）



第４図　甲斐国分寺跡鬼瓦３（１：４）



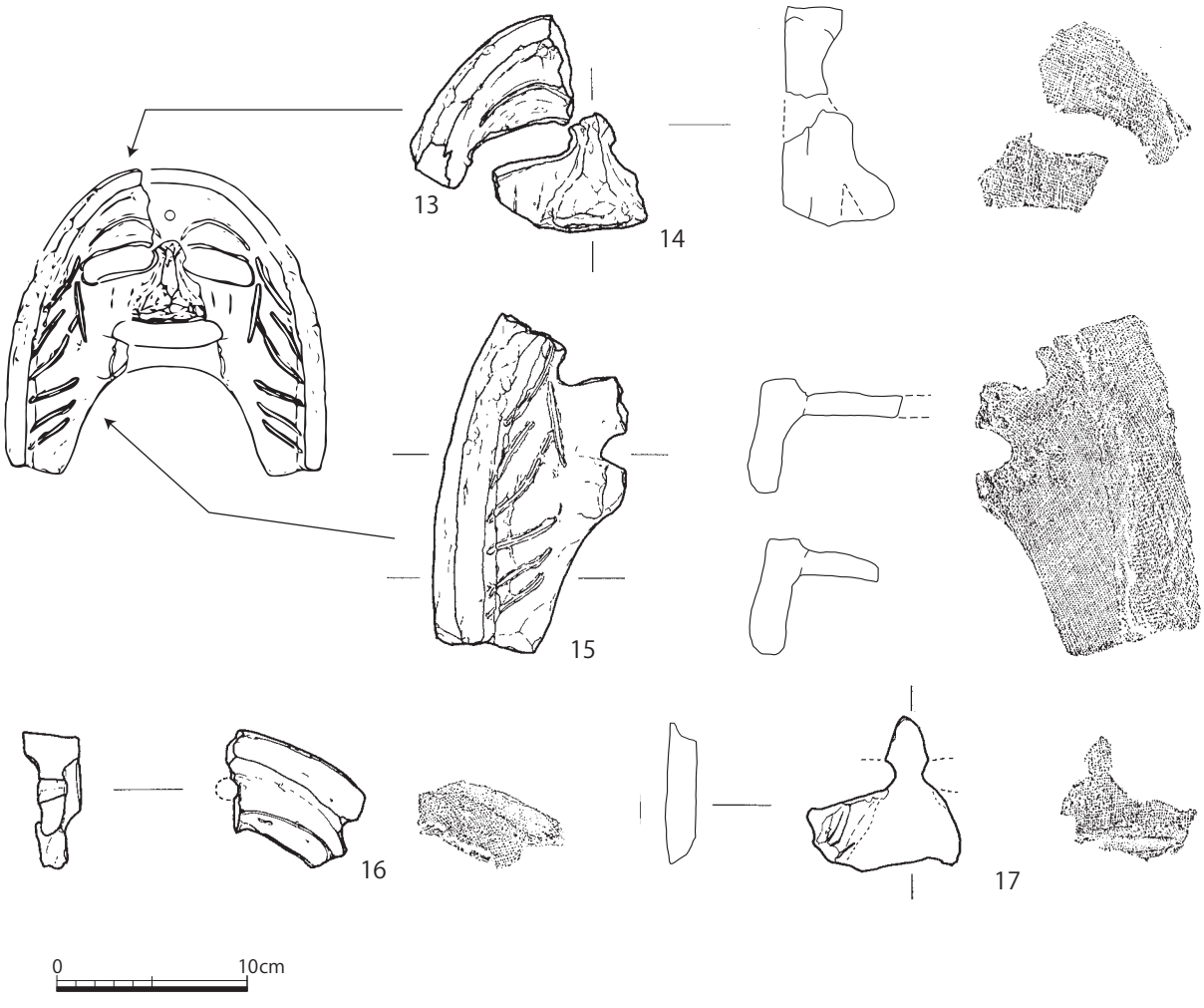
第５図　甲斐国分寺跡鬼瓦の鬼面眉間の范傷（左：３　右：７）



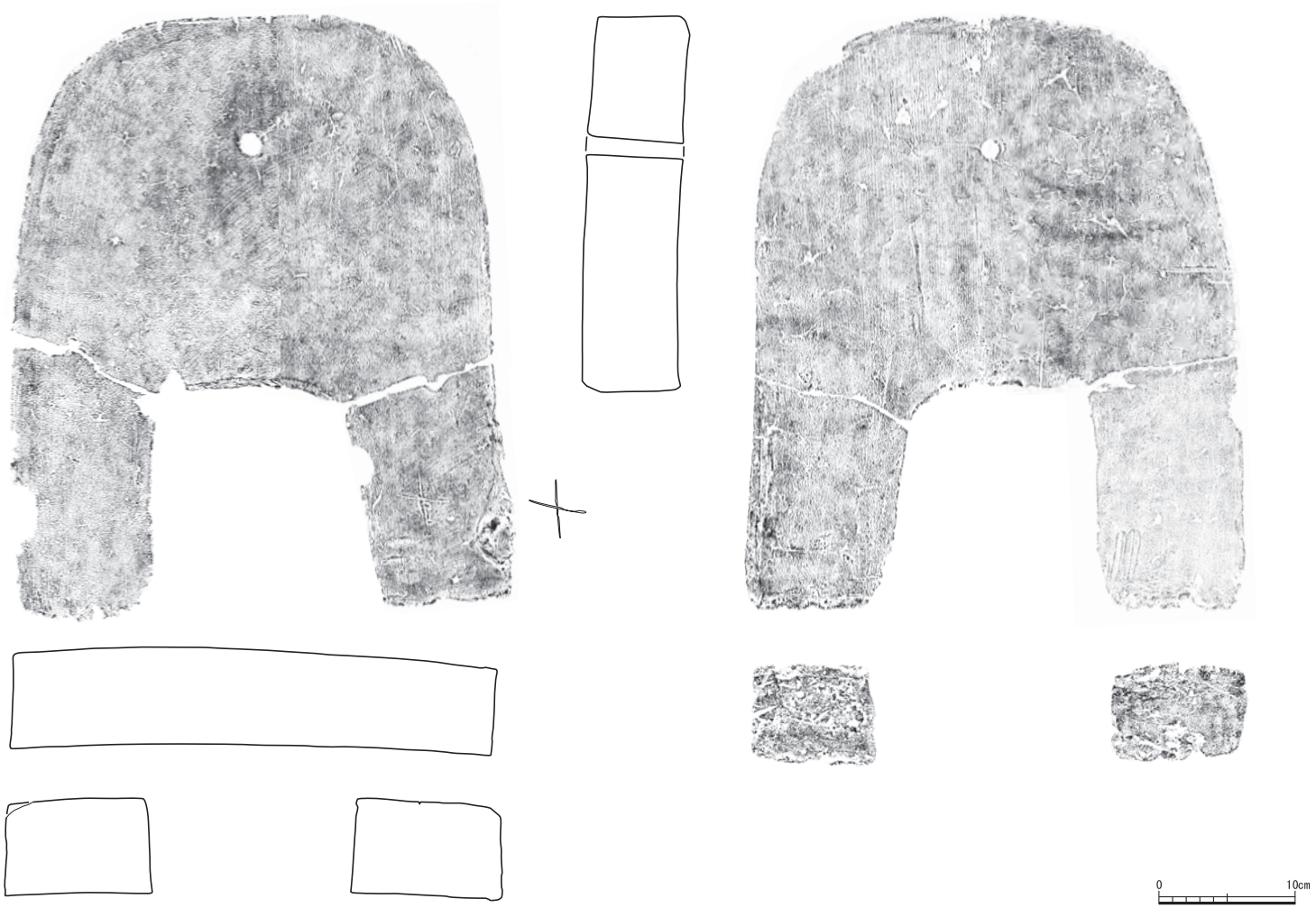
第６図　上土器遺跡鬼瓦・鬼板（10＝１：４　11～12＝１：６）



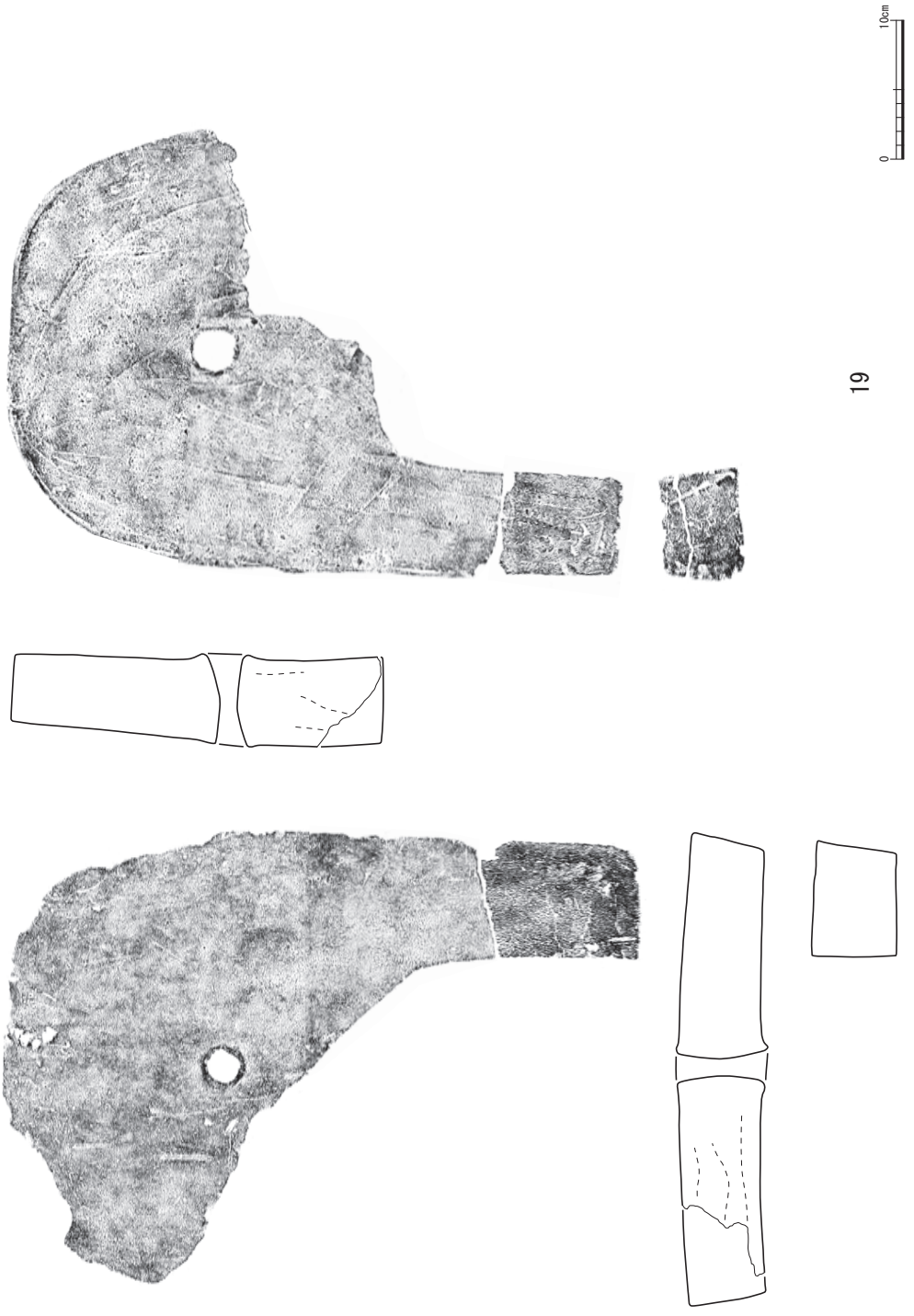
第７図　甲斐国分寺跡と上土器遺跡の鬼瓦の范傷（左：３甲斐国分寺跡、右：11 上土器遺跡）



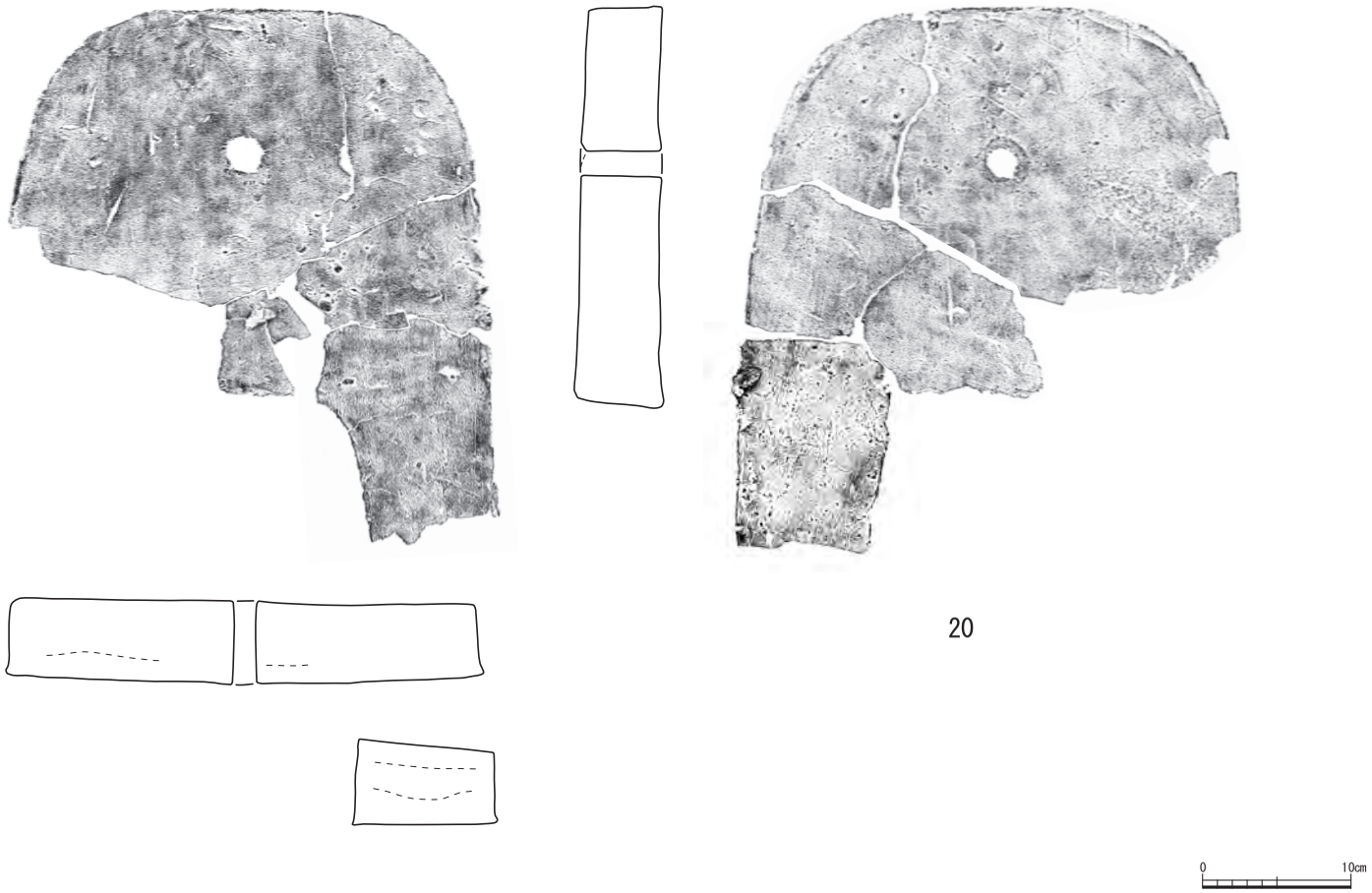
第８図　宮ノ前第２遺跡鬼瓦（１：４）



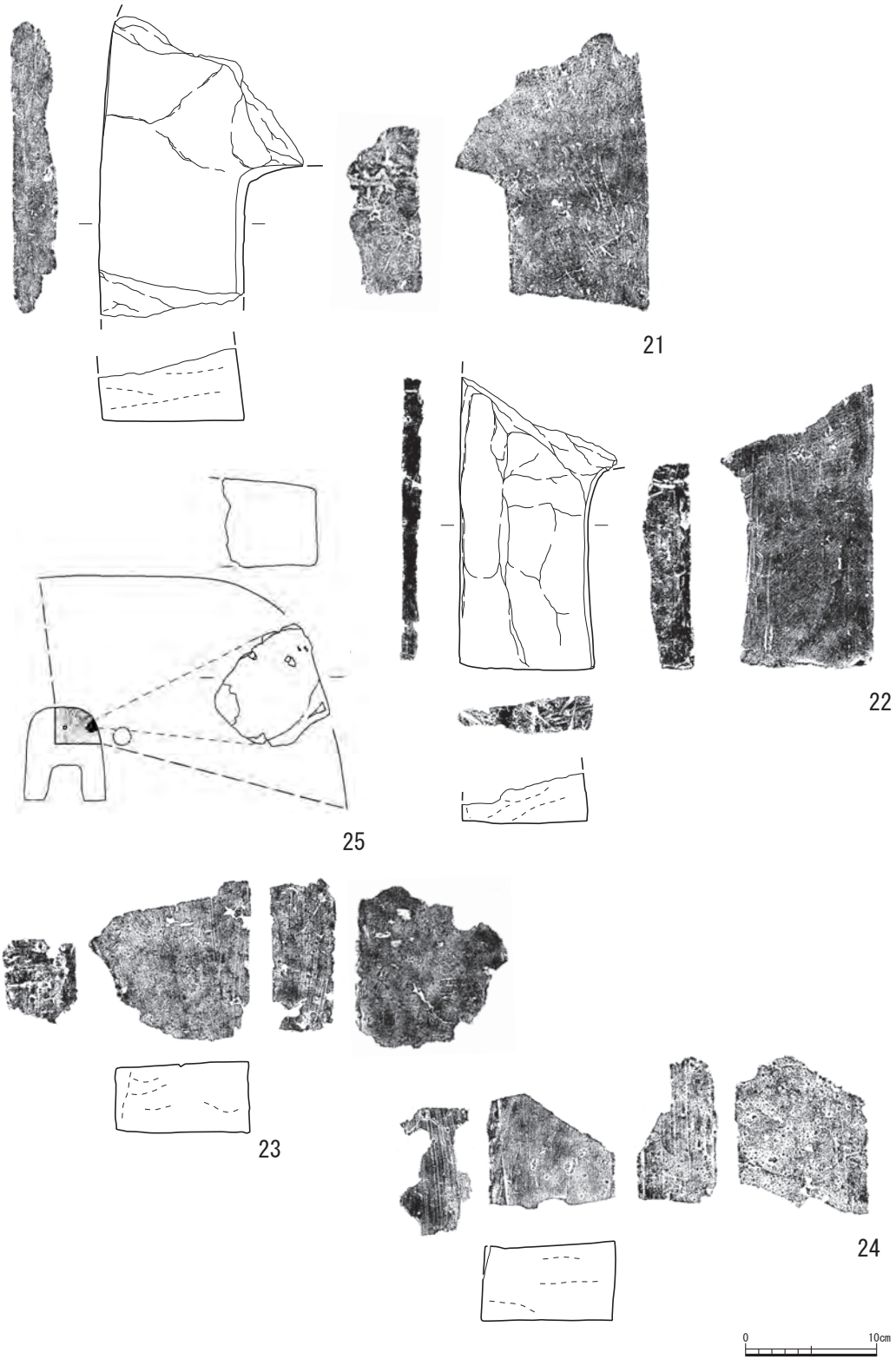
第９図　信濃国分僧寺出土鬼瓦実測図（１：５）



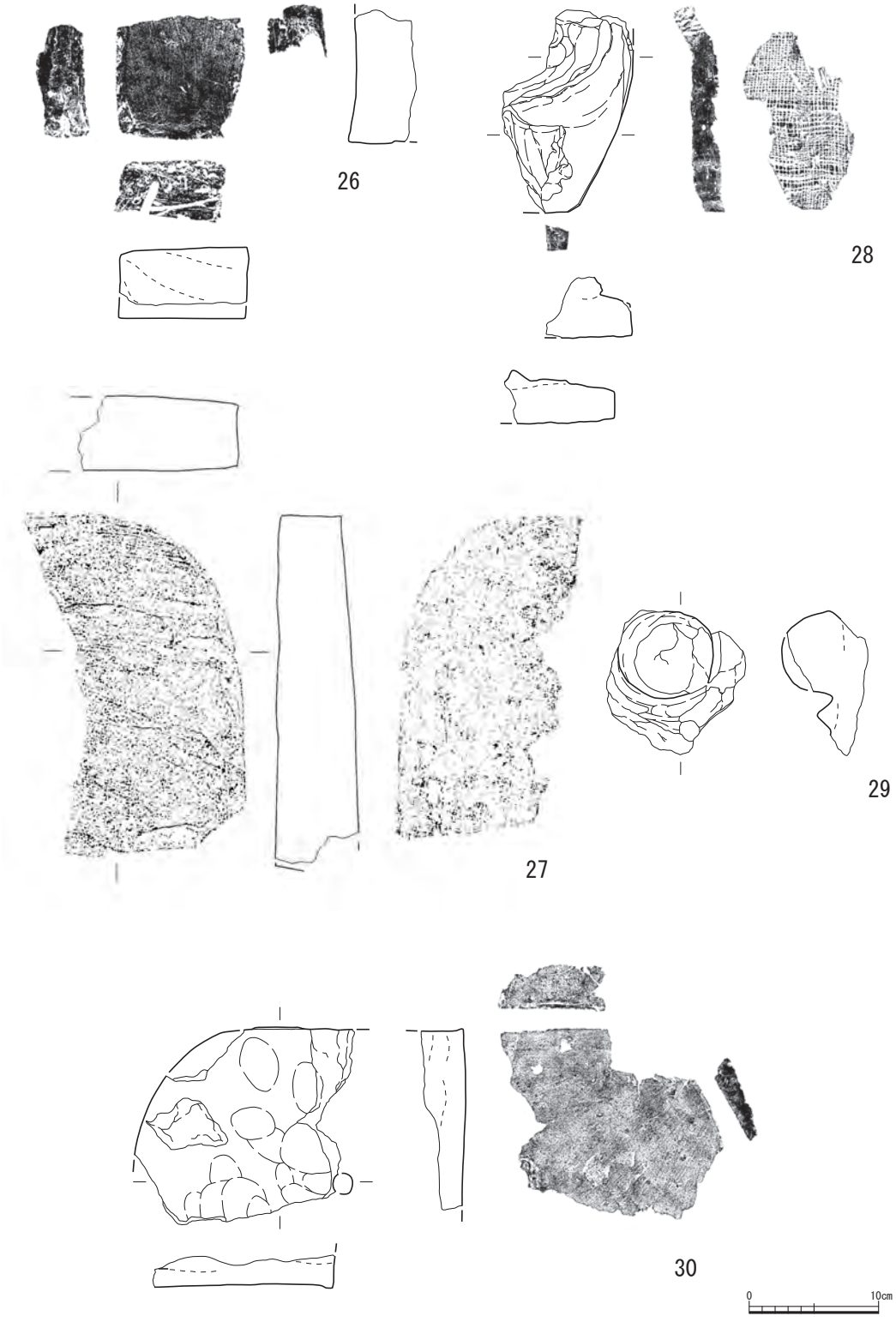
第10図　信濃国分僧寺出土鬼瓦実測図（1：5）



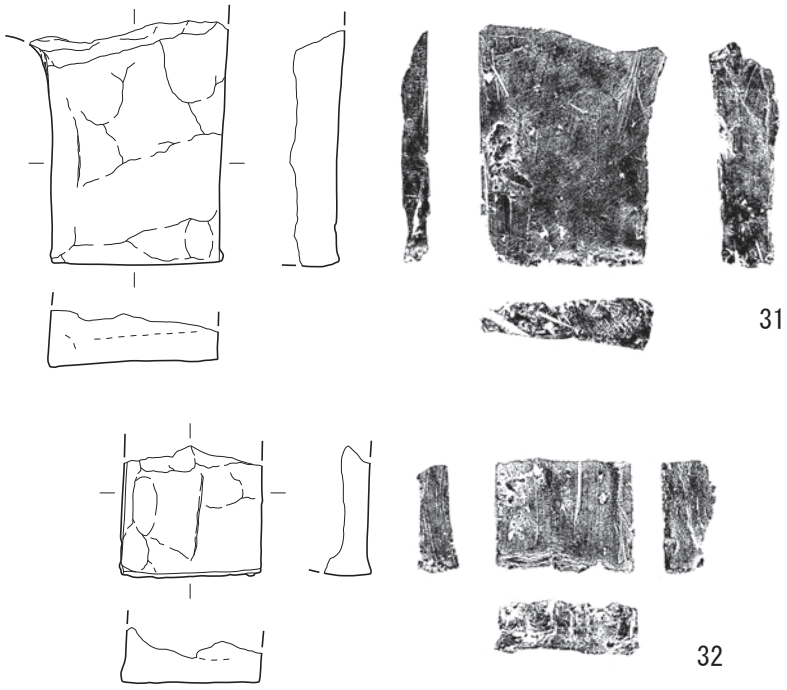
第 11 図　信濃国分僧寺出土鬼瓦実測図（１：５）



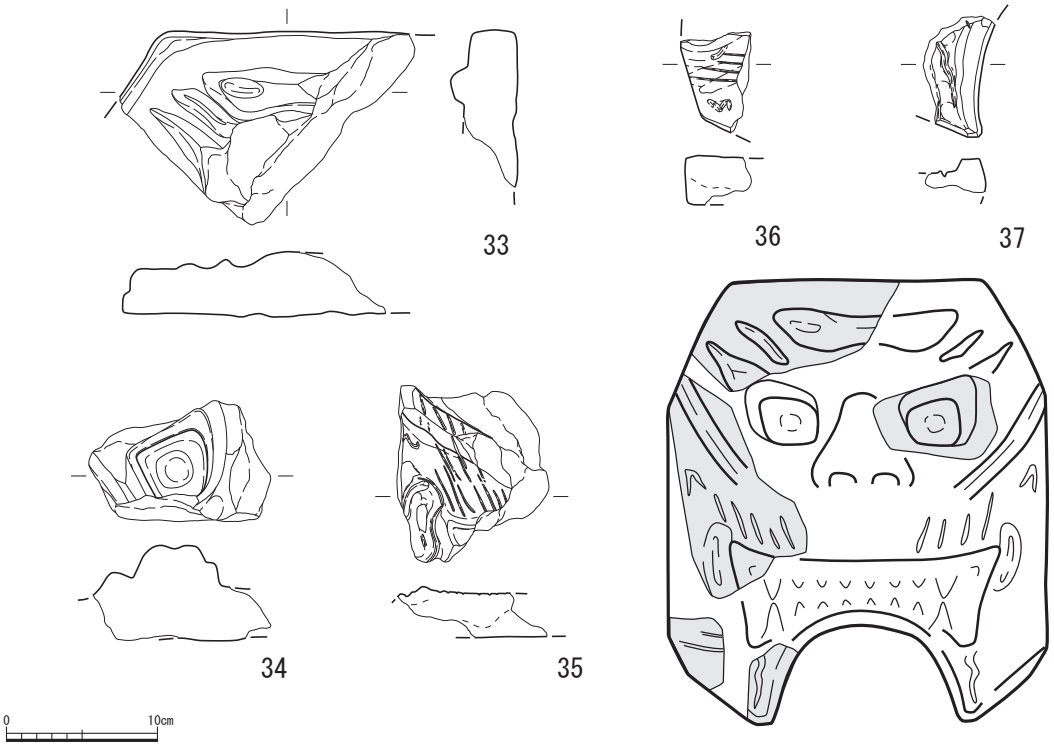
第 12 図　信濃国分僧寺出土鬼瓦実測図（１：５）



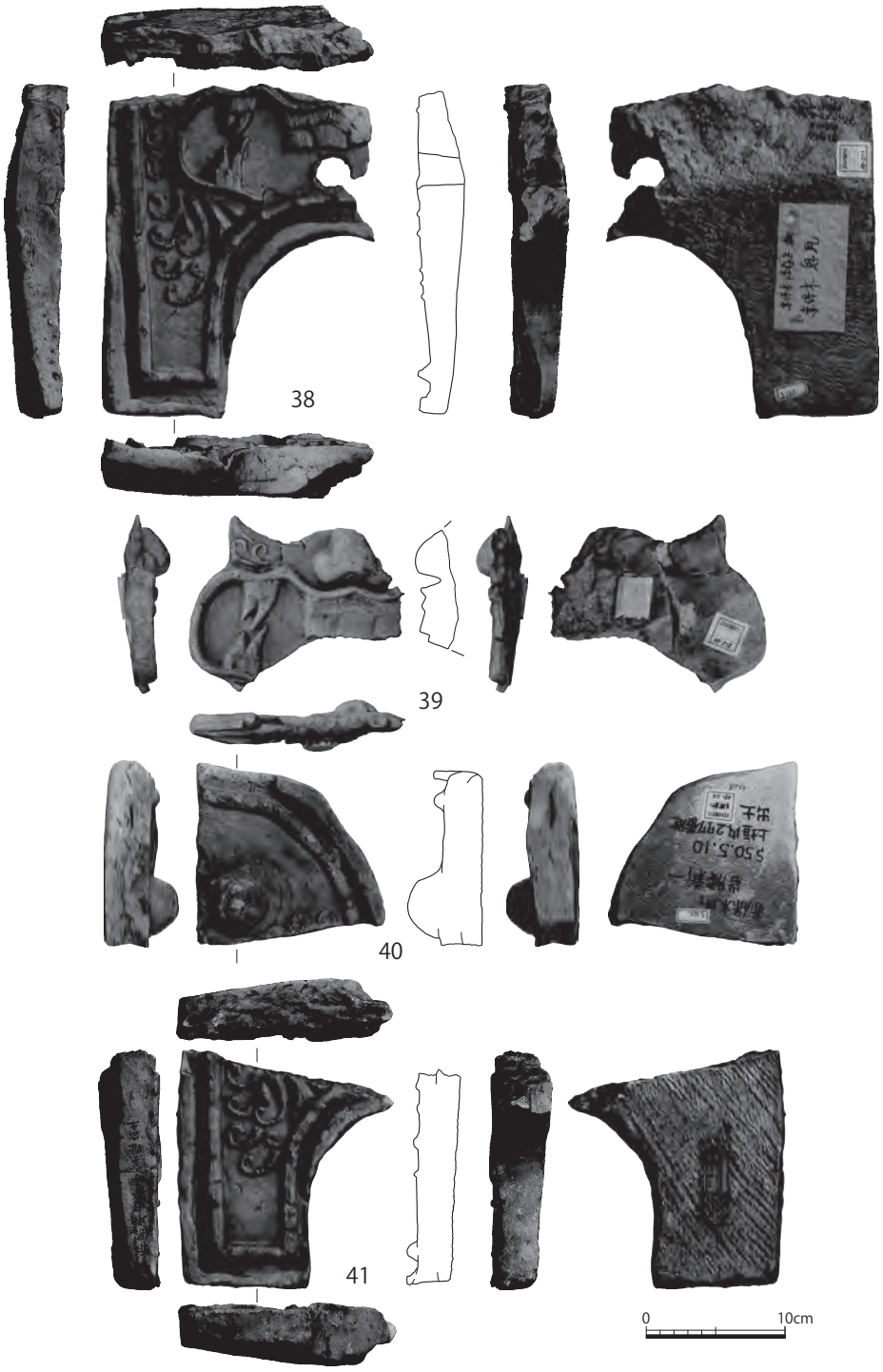
第 13 図　信濃国分寺尼寺跡・瓦窯跡出土鬼瓦実測図（１：５）



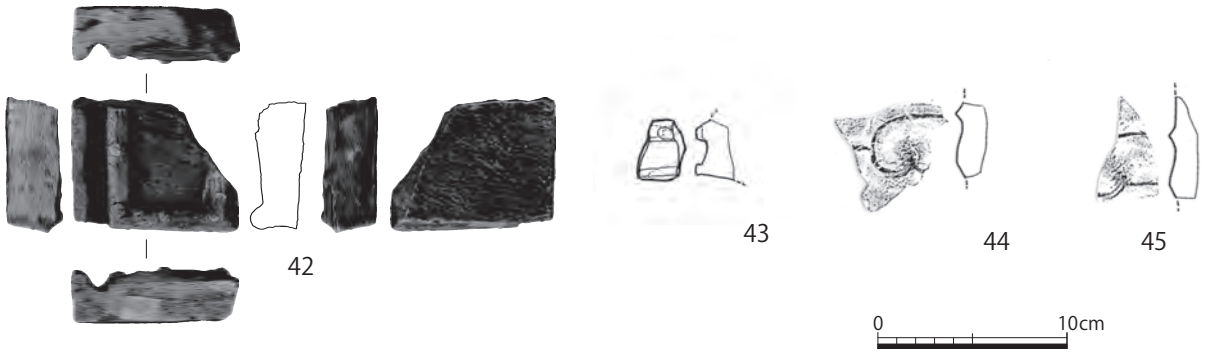
第 14 図　信濃国分寺瓦窯跡出土鬼瓦実測図（１：５）



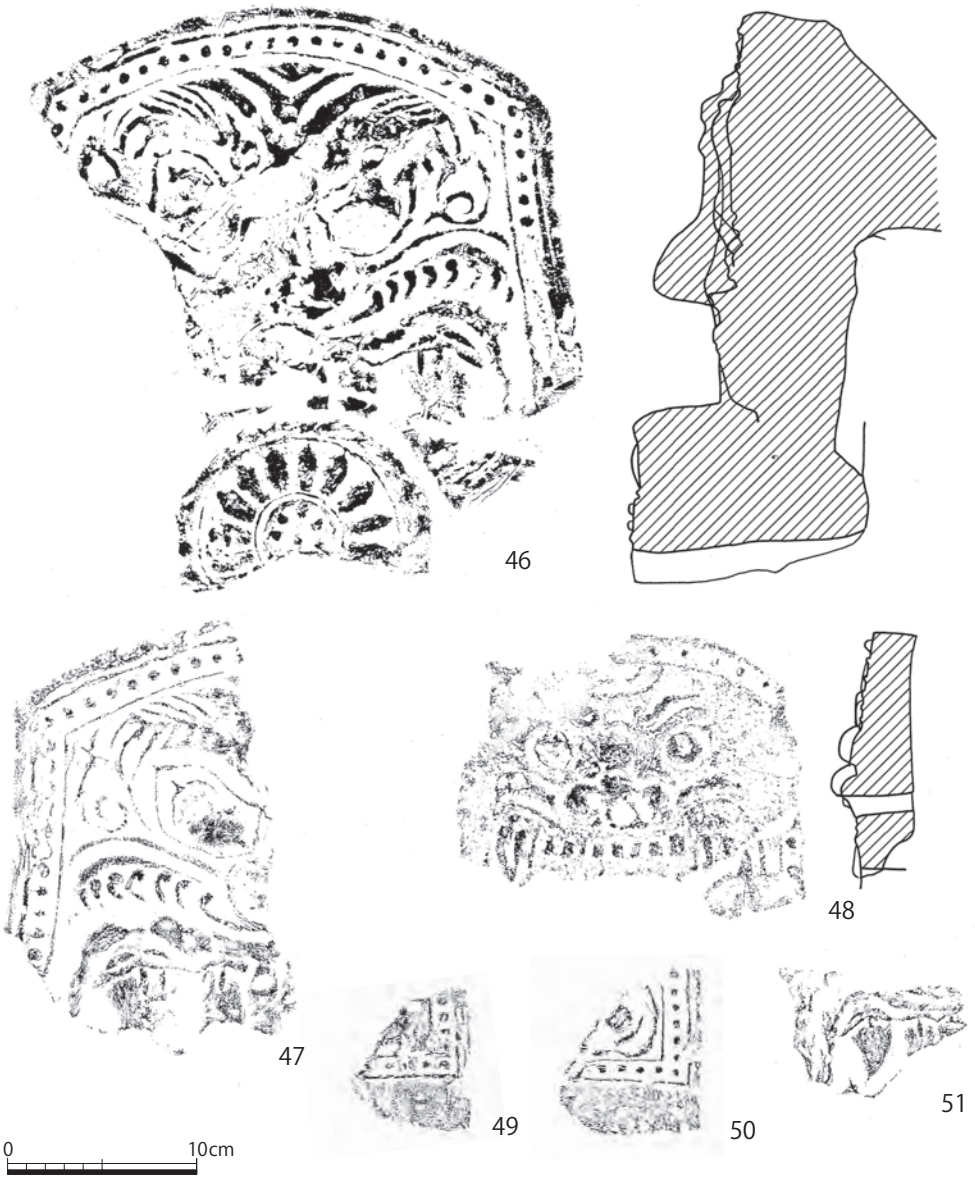
第 15 図　明科廃寺出土鬼瓦実測図・推定復元図（１：５）



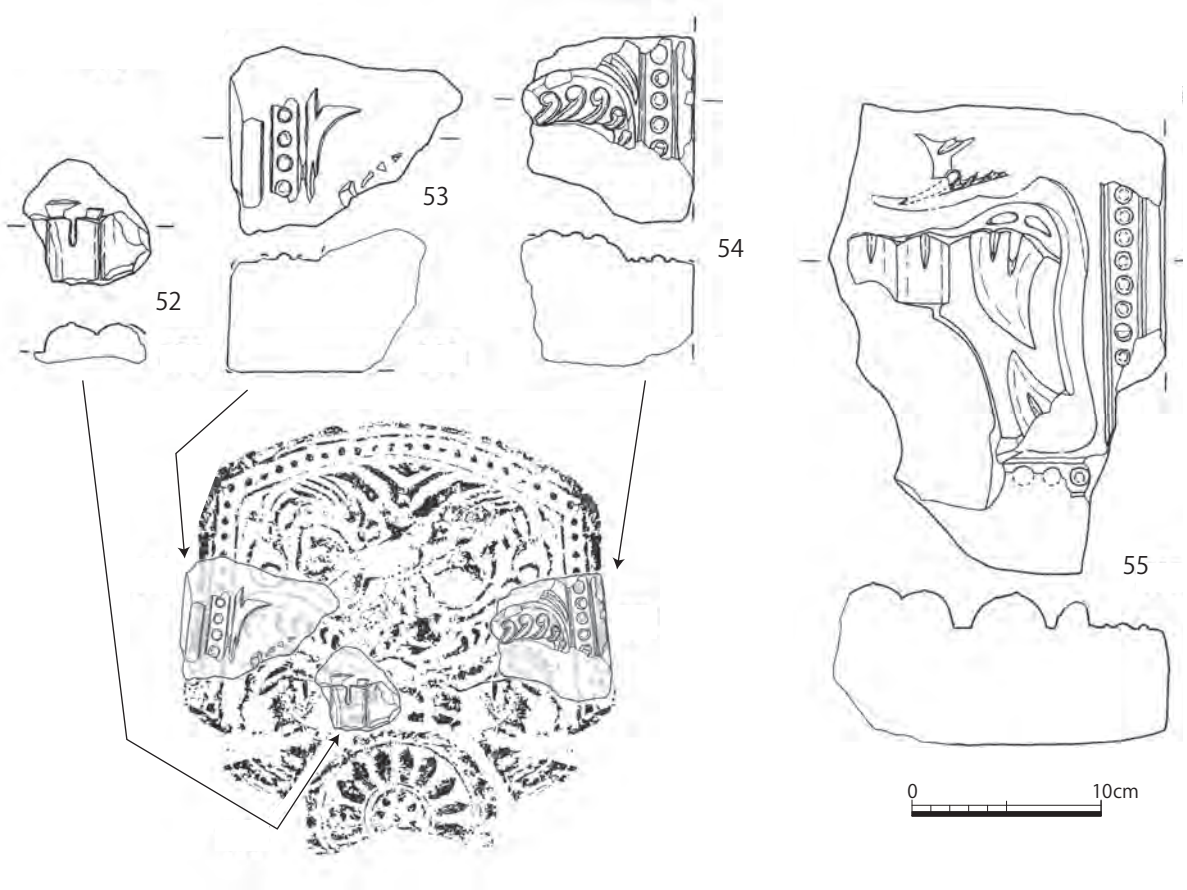
第 16 図　飛騨国分寺瓦窯跡鬼瓦実測図（１：５）



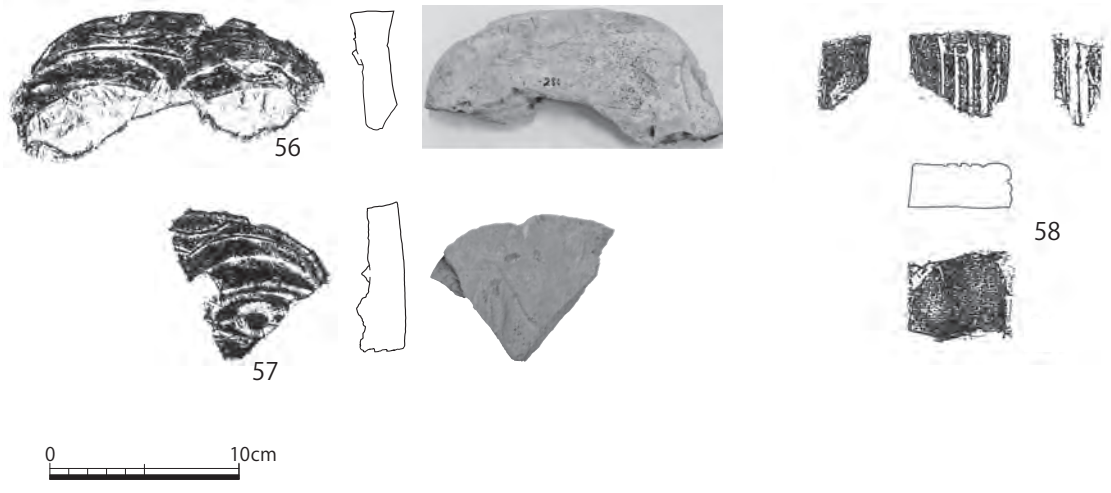
第 17 図　飛騨国分寺跡鬼瓦実測図（１：４）



第 18 図　美濃国分寺跡鬼瓦実測図１（１：４）



第 19 図　美濃国分寺跡鬼瓦実測図２（１：４）



第 20 図　長良廃寺跡鬼瓦実測図（１：４）